

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.130

1993. 4. 25

=巻頭言=

カリキュラム開発のパラダイム ●堀地 武 / 2

■第5回大学教員研修プログラム

カリキュラム開発をめぐる / 4

■FD通信①

比較文化論的授業比較 — 知的エンターティナー
としての魅力開発を — ●藤原正彦 / 6

■特集 = 社会学合同セミナー / 7

■千人会・寄付金報告 / 8

■業務通信

◎生涯教育のシンプルな殿堂を目指せ / 9

◎私と国際学生シンポジウム / 10

■利用状況 / 11

■開催予告・館長室から / 12



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

カリキュラム開発のパラダイム

一般教育学会会長・香川大学名誉教授 堀地 武

カリキュラム開発の問題と一般教育が現在置かれている状況との間には、深い関係がある。私が一般教育学会の中で十数年にわたって考えてきたことを中心に、カリキュラム開発のパラダイムの問題点を指摘し、新しいパラダイムに転換していくための条件を検討してみた。

●行政中心・法令準拠主義のパラダイム

従来の大学教育改革に関する状況を見ると、行政中心の、悪しき意味での法令準拠主義とでもいえるようなパラダイムが存在していることに気づく。

例えば、大学審議会の答申では「今すぐ原則など変えなくてもよい。一般教育は重要であり、それについては大学人の見識を信ずる」と述べていたにもかかわらず、大綱化直後には、一転して一般教育を死語とみなす風潮がみられる。その背景には、教育主体としての自律的な責任とか節操とかをあまり問題にしない行政本位のパラダイムがある。

またファカルティ・デイベロップメント(FD)の問題でも、その必要性が認められているにもかかわらず、あくまでも行政当局が主体で「ファカルティをデイベロップする」という表現になっている。しかしやはり「ファカルティ自らがデイベロップする」ことが本来の目的なのであり、それによつてはじめて効果も表れるのではないか。

また、改正設置基準の中では「教育課程」という概念がはじめて投入され、その意義を高く評価する動きもあるが、行政本位のパラダイムの枠の中では、カリキュラム改革も授

業の科目単位の割り振り変更、科目群の名称新設、学則変更などのいわゆる制度移入的なことが問題となる傾向が強い。

●パラダイムの新展開

これまではこうした行政本位のパラダイムが支配的であったが、そうでないパラダイムもあり得るのではないか。そこで従来のパラダイムと将来あるべきパラダイムを一応区別して、その発展を考える必要がある。この二つのパラダイムをわかりやすくするためにキーワードをあげて比較しておこう(表参照)。

一つは静的な制度上の諸要素の関係を中心に、合理的な体系の理解や策定を専らとする「スタティックス」であり、もう一つは、大

学教員・学生の活動に注目して、動的な自律的システム・過程のメカニズムを活用することに価値を見出す「ダイナミックス」である。

カリキュラムについて言えば、スタティックスはすでに述べたように、学則とか卒業の要件、授業科目や単位の一覧表の作成などが主要な問題になる。ダイナミックスでは、実際に活動するために必要な指導理念、いわ

ば哲学的立場であるとか実際の教授方法・学習方法などが問題として浮かび上がってくる。

一般教育の実施組織としては、スタティックスでは責任体制、要するにピラミッド型の責任体制図ができあがればそれでよい。ダイナミックスでは、事実上の責任主体が、わがこととして責任を果たし得る体制が必要とされる。大学の自己評価については、スタティックスでは制度内に位置付ける必要があるから、その位置付けは格付け評価において効果を発揮する。ダイナミックスでは、継続的に目的・計画(Plan)・実施(Do)・自己評価(See)を行ない、それをフィードバックして自律的な改善・発展を図ることが大事である。

この二つのパラダイムのどちらが良いとか悪いとかではない。実はどちらも必要だ。しかし、これまでの大学教育改革を見ると、大学設置基準といういわばスタティックスの枠の中で何もかも処理しようとしたためにダイナミックスがほとんど育っていない。

設置基準大綱化を契機として、大学教育のあり方は、行政本位で法令準拠主義のスタティックスから自律的システムのダイナミックスへ大転換を遂げることが、改革の基本である。具体的には、大学当局ないしファカルティの教育活動のそれぞれが自律的システムとして、その基本的な過程(Plan-Do-See)の連鎖によつて「FD活動」を展開して改善・発展を図ることである。

●「Plan-Do-See」連鎖によるFD活動の展開

そこです、この新しいダイナミックスの

主 題	〈スタティックス〉	〈ダイナミックス〉
大学教育及び 大学教育行政	静的な体系、法令・制度上の 関係、形式合理性・整合性	動的なシステム、教員・学生 等の活動、メカニズム、自律性
一般教育 カリキュラム	学則、卒業の要件、 授業科目・単位	哲学的立場、教授・学習過程
一般教育実施組織	責任体制	責任主体
大学の自己評価	格付け評価	フィードバック評価

表 「スタティックス」と「ダイナミックス」のキーワード比較



ほりち たけし
1923年生まれ。京都大学理学部物理学
科卒。香川大学名誉教授・一般教育学会
会長。専門は科学教育。

パラダイムの中で、自律的システムとしての教育活動に求められる主要要件をあげてみよう。

第一は、学生の学習活動との関連に留意しつつ、哲学的立場・理念・方針などの「目的」やカリキュラム・シラバスなどの「計画」を明確にすること。その際に、全体レベルから各授業レベルに至るまでの徹底した教育論を展開する必要がある。

第二は、継続的に目的・計画・実施に対する自己評価を行ない、その評価をフィードバックして自律的な改善・発展を図ること。ともかく大学として自己評価報告書を作ればよいということではなく、少なくとも一、二年なりは、改革委員会がアフターケアするために存続して評価することが大切だ。構想ができあがれば解散してしまう委員会では、その構想は棚上げになってしまい、かつての大学改革と同じような結果にもなりかねない。

第三は、自律的システムとしての企画・運営及び評価・改善に有効に対処し得る責任主体性を確立すること。従来のスタティックスの中では、カリキュラムと教育改革と自己評価の問題は全く別項目として、それぞれ別の委員会を設置して取り組んでいる。しかし、実際の教育活動を中心にして考えると、それは一体的な効果を発揮すべきものとして、計画を立て、実施し自己評価するという、いわば責任主体が継続して実行することが必要だ。

●学生の自律的学習能力の開発

ダイナミックスのパラダイムの中では、教育活動と同時に学生の学習活動という重要な

要素がある。にもかかわらず、現在の大学教育改革論議の中では、学生の学習活動にそれほど目が向けられていない。学生モラトリアム論だとか、学生消費者論だとか、大学レジヤランド論だとか、私語の横行など様々な形で言われているように、かつての学生像は破綻している。しかし、将来の学生像は作られていない。

そこで学生の学習活動を自律的なシステムとして考えれば、学生に対しても「Plan-Do-See」を要求することが大切だ。具体的には、まず①自主的な学習の能力開発。すなわち、学力本位の能力開発ではなく、学習活動において「Plan-Do-See」を遂行し得る能力、いわば自律的な能力を主として開発する。②自律的学習の条件を整備すること。その点、現在の大学はお役所並みであることに気づく。学生のガイドブック、シラバス、オフィス・アワーなど一つ一つ思い切ったチェックが必要だろう。ところが条件整備はある程度できるにしても、実際に学生が能力開発をできるかどうか危ぶまれている。しかし、自律的な人間として「Plan-Do-See」は不可欠なものであるという認識に立てば、学生自らにとっても真剣な取り組みができるのではないか。

●一般教育をめぐる哲学的立場の再評価

いま各大学では、独自の特色あるカリキュラムを開発することが期待されている。設置基準に決められた通りに行なっても、また現在のように一般教育を無視して、専門だけで特色を出そうとしてもできない。一般教育と専門教育は区別して考えることが大事だ。し

かし、教養部という形で学部と対等に置くことにも大きな無理がある。一般教育は一つのもっとも独立の概念として今後も生き続けるべきであろう。

これまでの平板な法令準拠的な一般教育のイメージを嫌って、一般教育という語を忌避したり、「全学共通教育」「非専門教育」などにわざわざ改称しても、改革のきっかけにはなるかもしれないが、あまり効果はない。これまで一般教育と言われてきたものは、やはり一般教育という言葉で呼ぶべきである。

わが国の一般教育を考えると、これまでは総合ないしインター・ディシプリナリーにとられすぎていた観がある。特に、国立大学教養部が学部昇格したり、総合的な学部を創設したりするような志向が総合科目を必要以上に重視する実情があった。この際、もっと基本的な学問・教育システムの発展の自律性に注目した、哲学的立場を再評価する必要がある。

最後に、現代の社会や学術の情報化・国際化の趨勢に対応するカリキュラム開発も、行政府のバラダイムの中で理由づけるだけではなく、あらためてファカルティと学生の自律的な活動中心のパラダイムの中の哲学的立場から正當に意味づけられてしかるべきだろう。これまでもあまりにも画一的すぎた、そして現在もまだ画一的である状況を破るためには、各大学で実績を積み上げていくことによって、新しいパラダイムを豊かな内容のものにしていくことが期待される。

(文責・編集者)

よりよい大学教育の方法を求めて カリキュラム開発をめぐる

戦後四〇年にわたって、大学教育の枠組みを規定してきた大学設置基準が一昨年改正され、どのような教育を行なうか、各大学にその具体的な設計の自由が大幅に認められることになった。従来は、開発すべき学科目について、設置基準に詳細な規定が示されていたので、それに従って科目を配置していくだけでも、一応カリキュラムの形を作ることができた。

ところが、今回の改正によって、各大学はそれぞれの責任において、独自のカリキュラムを編成し、教育にあたらなければならなくなった。根本から、カリキュラムとは何か、どうやって開発していくかが問われている。そこでプログラムでは、カリキュラムの開発に際して最も重要な点は何かを、その理論的、制度的側面と共に、最近の代表的な事例の研究を通じて考えることを目的に開催された。

なお今回は、教育歴七年以上のベテランと、カリキュラム開発の主導的立場にある教員を主な対象としたが、カリキュラム開発への関心の高まりを反映してか、参加者は41校・70名に上った。

一般教育学会会長でもある堀地武・香川大学名誉教授の講演（2〜3頁参照）の後、四人の講師から、それぞれの大学

及び学部でのカリキュラム開発の実態が語られた。

● 設立準備に時間をかける

いま注目されているSFC（慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス）の設立に関与した、曾根泰教・慶応義塾大学総合政策学部教授から、同キャンパスの発足の経緯並びにカリキュラムの特徴が紹介された。

SFCの設立に関しては、大変準備に時間をかけた。計画の合意を形成するために、毎週のように泊まり込みで会議を行ない検討した。また、他大学のまねをしたくないという姿勢で計画を進め、視察も全く行なわなかった。

一般教育の問題は大学設置基準改正以前に検討を開始した。独自の解釈にたつて、様々な学問分野に触れさせ、知の相対性、アプローチの多様性を学ぶことに重点を置いてカリキュラムを考えている。

語学教育に関しては、新入生には語学選択のために半年間総合講座を行なう。それにより、英語以外の外国語を選択する学生が増加した。また、保健体育については心と体のウェルネスとしてとらえているが、学生の評判も良く、今後も継

続されよう。

しかし、SFCで採用したシステムのも多くはアメリカで行なわれているものであり、アメリカ的なものを超えることができるかどうかという問題がある。

学生に対する教育の準備に追われ、教員の負担がかなり多いこと。学生が必要以上に多くの科目を履修してしまうこと。現在新カリキュラム委員会を設け、トータルな見直しを進めているところである。

● 「浴衣をワンピースにする」難しさ

一般教育の問題を考えるにあたっては、教養部改組の問題を避けて通れない。京都大学総合人間学部教授・山本利治氏は、教養部を総合人間学部改組するにあたっての経緯や改革されたカリキュラムの特色などについて解説された。京都大学では、各専門分野に限定された個別的研究・教育に終始するのではなく、それらを総合して人間と世界に関わる現実の全体を捉え、これに進むべき方向を与えるような新たな学問的営為を確立することを目的に、教養部を改組して総合人間学部を設置することにした。

まず授業科目については、現行の一般教育科目、基礎教育科目などの区分をやめ、「学部固有の専門科目」、「学部理念に基づく専門科目」、「伝統的学問分類に基づく科目」の三つのカテゴリーに分類した。次に、これまでの前期二年に一般教育、後期二年に専門教育という区分を

廃止し、四年間の授業科目を有機的に結合したカリキュラムを作り、全学に開放する科目を設定している。

また、他学部にはない副専攻を設け、各自の専門分野以外を系統的に履修させることにし、単位修得の場合は認定書を発行することにした。

さらに、平成五年度からは、現行の一般教育科目に代わる全学共通科目が開講されることになった。そしてこれを総長主催の教育課程委員会で企画・調整・運営するという形を採用した。これらの改革された点を紹介しながら、山本氏は改革の現状を「浴衣をワンピースに作り替えるように、柄が合うと身体に合わない、身体に合わないと柄が合わないという仕組みがつきまとう」というユーモラスな例えを交えながら、改革をする上での苦労を語られた。

● 教養・専門の有機的統合をめざして

設置基準改正に伴い、各大学では教養科目と専門科目との関連について、現在様々な議論がある。その中でも理工系単科大学における現状はどうか。柴田喬・電気通信大学電気通信学部助教は、同学部の事例を紹介しつつ問題提起された。

高校卒業時は世界観や宇宙観を形成する時期でもあり、だからこそ義務教育とは異なった教育がなされるべきである。ところが、いざ授業に出て学生に接すると、失望したり挫折感を味わう教員が多



カリキュラム開発をめぐる大学教員研修プログラム
—前列右から、掘地、曾根、山本、柴田、磯田の
5氏。大学院セミナー館にて

い。学生にアンケートをとると、「一年生の段階での授業は面白くない」という回答をする。少なくとも、「教養理系科目は専門の一部」というカリキュラムの意図を学生は理解できていない。

一般教育の教員は、「数学は数学であり、物理学は物理学である。理系の物理などと呼ばれるものは、学問としては存在しない」とよく言う。しかしそれだけでは、自然界を支配する物理的な認識、物質とは何かという科学的な認識を持たないままに終わってしまう恐れがある。いわゆる一般教養としての数学、物理、化学はきっちり残すべきであろう。ただ

し理系の基礎科目は、今までの一般教養科目とは違う形で、課程として見直さなければいけないのではないか。そうすれば「方法的にも価値観的にも専門系との結合は深まり、かつ学生の進捗状況に對してダイナミックなカリキュラム構成ができやすくなるのではないか」と柴田氏は問題提起された。

●女性の社会情報学への試み

科学技術の発達により、今日では生活を取り巻くものがすべてが機械化されている。しかし、それがどういうシステムで動いているかがわかっていない。そのシステムの役割を説明するという理念で開設されたのが大妻女子大学社会情報学部である。同学部長・磯田浩氏は、新学部の理念の紹介から発題を始めた。

社会情報学部では、一年生から情報処理に関する授業があり、初歩的なところから始め、実用的なソフトウェアの仕組みなどを教える。

次に語学教育については徹底的に実用的な授業を展開している。日本語でも小論文を書かせて添削している。

また、社会を見る目を持たせるといふことで、教師の専門を活かした生活原論、加齢学の講義などの試みも採用し

ている。以上の事例を紹介しながら、「すべてのスタッフが新しくなったので、意志統一という点ではまだまだ満足ではないが、教員も張り切っているので、数年後にはしかるべき評価ができるのではないか」と提起された。

以上の発題の後、参加者は五つの分科会に分かれ、発題者とともに議論を深めた。

●語学・体育授業は不要なのか

翌日はそれぞれの分科会での議論の内容が報告された後、カリキュラム開発のあり方、外国語教育や体育教育を取り巻く状況について意見が出された。

大綱化の中で、真つ先に単位が減らせようとしている科目は語学と体育である。まず語学については、8単位必修も維持できない。また、従来効果を上げてこなかったという、専門担当教員からの批判もある。その上最近では、大学当局から英検や語学学校での成績を単位に換算しようという意向すら出始めている。しかし、語学担当教員には、批判されているという意識が不十分なのではないか。

また体育については、学生の中には同好会に入るか、多くのお金を投じてもフィットネスクラブに通った方がよいと思っている者もいる。しかし、「大学内にスポーツクラブ的な施設を置き、学生にメニューを与え、コンピュータでプログラムができるようにすれば、町中のスポーツクラブよりも良いはずである。同様

のことは、英語教育についても言えるはずである」という意見も出された。

●求められる教育目標の明確化

ところで、カリキュラム開発にあたっては、入学してくる学生に合わせてカリキュラムを考え直すべきだという意見がある。大学は入学ガイダンスの折に動機調査を行なうべきであろうが、それに加えて教員の側がどういう学生を育てていくかが問われるのではないだろうか。そのためにも大学教育の目標の明確化、再構築が必要ではないか。

新学部を設置する際には大学教育の目標や理念が論議されるが、既存の教育体制の中では議論が成立しないことが多い。しかしながら、事務職員も含めて、前向きに話し合うことが最も必要である。全員を納得させることは不可能かも知れないが、何回も話し合いを持つことが重要なのではないかという発言があった。

これまでのように単なる科目群の名称変更とか、科目単位の割り振り変更というような表面的な改革ではなく、大衆化した大学における教育はいかにあるべきかという根本問題についての学内論議を踏まえながら、カリキュラム改革が問われなければならない。抜本的な改革にはつながらないことは明らかである。ここでの議論が各大学でカリキュラム開発の問題に取り組む際のヒントになれば、大きな成果といえよう。

●FD通信①

比較文化論的授業比較

——知的エンターティナーとしての魅力開発を——

お茶の水女子大学理学部教授 藤原正彦



ふじわら・まさひこ／昭和十八年生まれ。東京大学理学部数学科卒。コロラド大学助教などを経て、現在に至る。著書に「若き数学者のアメリカ（日本エッセイストクラブ賞）」「数学者の言葉では「父の旅・私の旅」・「遙かなるケンブリッジ」など。

わが国の大学では「いかに教えるか」ということがしがらみにされている。教員の側は、学生の頭が悪いとか、怠惰であるとか、学問は教えられないものではなく自分でするものであるとか、大学には反面教師も必要であるとか、あらゆる口実を用意している。しかし、これからは大学がエリート機関であった時代の言い訳は通用しない。

●研究と教育の葛藤

研究至上主義がまだにはびこっているのは、教育の実績が大学社会では正しく評価されないからだ。研究上の業績は論文や著作を通してある程度は評価されるが、いくら情熱を込めて素晴らしい講義をしてもなかなか評価されない。

良い論文を書くよりは良い講義をする方が難しいにもかかわらず、そのような能力・努力・誠実さ・情熱はほとんど評価されない。大学教員も人間であるから評価の高い研究の方に走るようになる。このような研究と教育の葛藤は、日本だけではなく世界中のどの大学にもある。私がいたコロラド大学やミシガン大学でも、教育派の教員と研究派の教員がお互いに軽蔑し合っていた。

もちろんアメリカでは、評価によって

月給が決まってしまうので抗争も熾烈になる。教育派の人々が、教育に対する客観的評価を求めた結果、学生が講義を評価するティーチング・エバリュエーションの制度が取り入れられた。例えば、コロラド大学では学生のティーチング・エバリュエーションをコンピュータで処理し、その結果を教員の手元に直接送って、教員はそれを見て自分の講義改善の資料にしていた。

●学生の授業評価は有効

専門家の調査によれば、授業改善のためには有効であるという結論が出ているが、日本でも海外でも「学生に評価する力があるのか」「点数の甘い先生が良い評価を得るのではないか」などいろいろと反対がある。

アメリカではかなり公開されていて、学生が講義をとる時の参考になっている。しかし日本でこの制度を導入する際には、非公開にするとか、質問内容を吟味するとか、講義評価と名前を変えるとか、昇進・昇給には当面は使わず個人的な授業改善のためにのみ使うようにするなど日本の風土に合わせる必要がある。

これによって、単にティーチングを改善するだけではなく、研究至上主義を突

き崩すことにもつながるかもしれない。

アメリカは日本の十年先を行っているが、最近では景気後退もあって、予算が切り詰められ、各大学でコースや学科が廃止され始めている。例えば、カリフォルニア大学では全体で約三分の一の教授が勧奨退職を受けることになったし、ノース・キャロライナ大学では過去三年間に三二〇のコースが取り消しになった。アメリカのほとんどの一流大学では、Center for teaching and learningが作られ、そこに大学教育の専門職を置いて、大きな予算を使ってティーチング改善の努力をしている。例えば、ハーバード大学でも物理学科全体の講義をビデオで撮ってセンターで評価するとか、毎月一回学部教育を改善するためのセミナーを開くなど過去数年に六億円以上もの予算を使って努力している。

●講義改善は社会文化の問題

日本では定年まで自分の講義に対する批評は特別の機会でもないかぎり耳にすることはないので、多くの教員は自分がどれほどまずい講義をしているか全く気づかない。しかもわが国では、ペラペラしゃべると軽薄だとか無口な人が重厚だとか腹の探り合いとか腹芸とか以心伝心

とか、むしろ言葉は不要でどちらかといえば「沈黙の文化」だとかいわれている。ここに日本人の講義下手の根本原因があるのではないかと。講義改善の問題は高校以下の教育全体あるいは社会文化の問題でもあり、他の教育問題と同じように国全体の問題へと行き着いてしまう。

●知的エンターティナーとしての魅力を

言語を大切に文化を育てていくことも大事だが、大学教員の課題は知的なエンターティナーとしての魅力を開発することではないか。講義を良くするためにはいろいろな要素があるが、これからは今までのような非人格化された講義、ロボットが教えているような講義を徐々になくして、もう少し知的なエンターティナーとしての魅力を導入することが本質的に重要となるのではないかと。そのためには二つのPが考えられる。

ひとつはPersonalityのPである。講義の中では自分のPersonalityを積極的に出すようにする。これをタブー視する教員もいるが、事実だけでなく自分の好き嫌いや意見を学生にぶつけることも必要だ。もう一つのPはPerforming artすなわち知的エンターティナーとしての表現力をつけること。Personalityは自主努力によらなければならないが、Performing artはこのようなFDセミナーなどで改善していきけるのではないだろうか。

(第3回大学教員研修プログラム
の講演より／文責・編集者)

カオスからの可能性

第12回社会学合同セミナー委員長
東京国際大学教養学部4年・小川文弥ゼミ

萩原恵美子



「やれば出来るものなんだ」と、心の中で微笑みながら、大学セミナー・ハウスを後にしたことを思い返す。

今や、「遊んでばかり」というレッテルを貼られた大学生も、そう捨てたものではない。社会学合同セミナーは、そんな大学生の一面を映し出す鏡である。

面白い事に、これだけの歴史がありながら、毎回、その性格を変えていくのが本セミナーの特徴とも言える。社会学という広いふところの中で、研究が限定されることもなく、運営に関しても、規則やマニュアルはなく、まかな流れだけを受け継ぐ、というその自由さが本セミナーを柔軟にしているのだろう。

しかし、自由には同時に責任がともなうものである。毎年、スタッフ、発表者は必死にならざるを得ないわけであるが、それが強い

芯となり、本セミナーを支えているのではないだろうか。

さて、コソコソと研究してきたものを表現できる、発表の場があるという点で、本セミナーは、(ハレ舞台のある学問)を実現している。それは、相手にわかるように内容や意味をハッキリさせなければならず、ごまかしのきかない厳しい場である。自己満足に陥りがちな、限られたメンバーでの研究に、「(喝)」を入れる絶好の機会でもある。更に、合宿という形態をとることにより、あらゆるところでダイレクトなコミュニケーションが可能である。討論会から、洗面所での談笑まで、いろいろではあるが、人と人との出会うところには様々な可能性がある。その点、学問に限らず、人間的にも得るものは大きいと確信している。何より、その時、その場所での味、

特集Ⅱ社会学合同セミナー

社会学合同セミナーは、一九九二年で第13回を終えた。学生主体の運営になりちようど10回をかぞえ、定着してきたと言えるだろう。我々スタッフもそれを自明のこととして受け止めてきた。しかし時代の移り変わりの中で、その形式とそれを支える学生の意識がここ数年で変化してきた。

今までの柱は「ゼミ発表—分科会—全体討論会」であった。しかし各ゼミごとに活動するゼミ発表とゼミの枠を全部取り払った分科会とを年間通じて活動することは非常に負担が大きく両方が中途半端になっていた。そこで、第12回からゼミ発表を基本としてプログラムを組んだ。具体的には、ゼミ発表を活かすためのオープンゼミとインターゼミで各ゼミ間の交流をはかり、分科会的要素を取り入

れるようにした。そして第13回では、ゼミ発表をより充実させるために、事前の発表検討会、質問会を設けた。この結果、ゼミ発表に対する質問や見解が多数出てくるようになり、研究発表がかなり活かされた。以上のようなゼミ発表重視のプログラムが、ここ二年である程度形づくられてきているように思える。

そして「ゼミ発表重視」という方針は同時に、社会学合同セミナーを各ゼミナールの連合体という形態に導いていく。この形態は独立した各ゼミナールが何かを生み出そうとして、ゼミナールの枠は保持しながら結び付くものである。この利点としては、①研究の成果をまとめて、発表する機会が持てること。②ゼミナールが客観化され、結束力が生まれ

一回一回がオリジナル

第13回社会学合同セミナー委員長
法政大学社会学部3年・田中義久ゼミ

植木 毅



わえない(ヘナマモノ)としての学問、経験の可能性がそこにある。ゼミナールという枠の中で研究を重ね、発表をしたと思えば、インターゼミ、オープンゼミ、分科会などの新しい枠で意見を交わす。ある程度固まった関係を土台に、それを壊し、また新たな関係をつくりあげるといふ流れが、本セミナーにはある。つまり、研究分野から人間をつくり出すよすがになつて、「カオス」をつくり出すわけだが、その中から思いがけない何かが見出される、というのがこの社会学合同セミナーの魅力である。



等身大の学問として、「わかる勉強」のできる場であると共に、自分たちが疑問に思っていることを追求しながら深めていける場として、社会学合同セミナーが今後も受け継がれていくことを期待したい。

これまで続けてくれた先輩方、そして、これから続けていくであろう後輩達との見えない関係に感謝しつつ、少しでも多くの大学生が、この場をステップに学問の面白さを見つけていって欲しい。大学生という立場でも、いや、大学生だからこそ、やれば出来るという可能性を大いに秘めているのが、社会学合同セミナーである。

社会学合同セミナーの沿革

専門分野を同じくする数大学のゼミが合同して合宿研修することにより、一大学ではできない共同研究の成果をあげると共に、大学間の交流を促進することをめざして当ハウスの教育プログラムの一環として誕生した。当時共同セミナー委員会のメンバーであった山岸健氏(慶大)が、社会学のゼミを担当されている正岡寛司氏(早大)、田中義久氏(法大)、平野敏政氏(慶大)、藤見純子氏(早大)に協力を要請したところ賛同が得られ、一九八一年三月八日から二泊三日の会期で、「現代家族—生活意識—その理念・実態・変革へのアプローチ」をテーマに第一回を開催。その後2回は当ハウス主催であったが、回を追うごとにハウスから独立して学生主導で企画したいとの機運が高まり、4回以降は文字通り学生が中心となり、企画運営を行なうようになった。以来今日まで、試行錯誤しながらも、大学間交流の実をあげ、着実に根を下ろしつつある。

てしまうと、前に述べたような学生主体の運営が形式的なものになってしまうのではないかとこの指摘を受けた。ここに社会学合同セミナーの本質が隠されている。つまり足腰の強いしつかり組織にしようとする、逆に形式的になり学生が「やらされる」という気持ちになってしまう。このことは、合同セミナーの一回一回がその時々々の学生の本音をもとに開催されることを物語っている。たとえ形式が変わったとしても、このような様々な試みが実践されていくことを期待したい。

千人会

'92年12月～'93年2月

◆現在会員一、四五五名(実会員数) ◆新しく会員となられた方々

- B 早稲田大学講師 荒井佐奈子殿
- C 図書館情報大学助教授 遠藤 卓郎殿
- B 文政大学教授 田中 慎也殿
- A 清泉女子大学助教授 塩谷 惇子殿
- C 法政大学助教授 江村 裕文殿
- A 大妻女子大学教授 堀地 武殿
- B 香川大学名誉教授 亀岡 篤殿
- C 松山東雲短期大学助教授 磯田 浩殿
- B 大妻女子大学教授 磯田 浩殿
- C 聖心女子学院理事長 竹井 恒子殿

◆会費ありがとうございました

- 荒井佐奈子、松元文子、岡島眞理、勝本保次、青木生子、納富照枝、慶伊富長、半谷高久、竹内啓一、尾田幸雄、堀野定雄、杉山吉茂、青柳清孝、示村悦二郎、小西正、茅伊登子、清水誠、濱川祥枝、来住正三、山田あきら、宮川松男、浮田久子、三浦安子、平松幸一、横沼健雄、金台休、麻生幸、茂木利一、福島正久、横山宏、栗田寛、大塩俊介、西田亀久夫、高木仁、住田友文、塚本利明、池田貞雄、福原満洲雄、正路徹也、杉山好、天野成光、平木典子、澤孝一郎、田中昭昭、川崎智永、合田信子、田村光三、川端香男里、市川孝正、伊藤学、飛田茂雄、森久、山田圭一、三浦永光、青柳総太郎、八木江里、茂木誠陸、高橋恒郎、徳座晃子、米満澄、大谷禎之介、田原勘意、池上秋彦、高橋浩爾、有山正孝、上田明子、瀬野信子、大川信明、川鍋正敏、西川道治、鈴木皇、佐藤進、森山俊雄、東川清一、後藤聰一、川崎正三、京藤哲久、大口勇次郎、小菅敏夫、小山弘志、青井和夫、松澤正夫、山口桂子、竹林代嘉、齊藤耕一、柳澤富雄、武田昌輔、江幡玲子、萩原玉味、慶谷壽信、佐々木良一、一番ヶ瀬康子、深沢実、新井明、大森東亜、伊藤洋、城謙輔、内藤正、中島力、西川大二郎、箱木眞澄、志鳥學修、猪瀬博、根岸愛子、乾崇夫、茅野良男、高村新、柳

父園近、鈴木博、上谷琢之、村上泰治、加倉井茂樹、京極純一、清水良三、古田勝久、池井優、片桐元、高橋昭三、小川洋輔、松山正男、石堂常世、小野寺嘉孝、籠信義、遠藤健治郎、谷口修、石井素介、吉川孔敏、佐藤音彦、田中慎也、田村皖司、小俣武夫、小田敏男、川喜田愛郎、小林清子、武藤義夫、飯田修一、中川太郎、富沢賢治、越智昇、磯野修、師岡孝次、池田温、小川政亮、田島信元、都留春夫、谷資信、山田辰雄、渡辺忠市、金子ハルオ、鈴木陽子、原豊、吉田公保、須田精二郎、玉田啓八、石井正博、矢田俊文、本田和子、伊藤千秋、板垣雄三、牧野誠一、寺東寛治、石川道夫、遠藤平治、昌谷春海、箕輪成男、大岡信、丹羽芳雄、井原恵治、中岡二郎、高橋和之、新保清子、上山碩、油井大三郎、北村嘉行、森昭彦、藤井良治、手島修蔵、藤巻正生、斎藤眞、竹村憲郎、蓮見亨彦、久保亮五、高松正昭、福永寿巳夫、新澤雄一、今井清一、石井明、原田敬一、亀岡篤、内山正熊、東洋、若山邦紘、野澤農、山口俊夫、島田外志夫。(敬称略)

おたより

●多忙の中を、理学部開学式にご臨席下さりありがとうございました。私、来年三月を以て学長職を終え、本業に復帰するつもりです。(日本女子大学学長・青木生子)

●多くの皆様のご支援のもとに新大学も今年第一回の入学生を迎えました。些少ですが本年も会費をお納め出来ることを感謝しております。ご発展を祈り上げます。(北陸先端科学技術大学院大学・慶伊富長)

●岡館長様 還暦のお祝いのご挨拶をいただきどうもありがとうございました。教員も誰一人気がつかず私も気がつかずにおりました。(竹内啓一)

●おかげ様で十二月十五日八十九歳の誕生日を迎える幸せをかみしめております。(茅伊登子)

●人工透析9年目週3回4時間半ずつ。工学部ができてそちらの講義に追い廻されています。努力が何の役にも立たない空しさを感じています。そちらには、時折愚妻と写真などを撮りにいっています。(創価大学教授・池田貞雄)

●春には恵泉のフレッシュマン・キャンプでお世話になりました。プレイン・リビング&ハイ・シンキングの原則が貫き続いているセミナー・ハウスを、現代の世相の中でまことにたのしく思います。「嵐の中に堅く立って山の上の出会いの城よ」(恵泉女学院大学教授・杉山好)

●亡き上代タノ先生の理想をこめられたセミナー・ハウス。ご発展を祈り上げます。(合田信子)

●十二月十七日付朝日新聞で、飯田宗一郎先生の近況拝見、ご活躍何よりです。関係者皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申しあげます。(主婦の友社通販事業本部・青柳総太郎)

●いつも岡先生からのメッセージをいただき嬉しく思います。十月二十八日からフランスに約一カ月以上交換研究で出かけます。(東洋大学教授・八木江里)

●大学生の一部を教えるようになり、千人会での情報が大変有効となっています。(日本工業大学非常勤講師・松澤正夫)

●誕生日お祝い金をするところが増えてきてとうとう一年に12回の誕生日ができてしまいました。毎月1の日です。(日本女子体育短期大学助教授・江幡玲子)

●山下幸夫氏や私は前田護郎の門下です。僅かのもの、お納め下さい。(日本女子大学教授・新井明)

●年頭に当り、ますますのご発展を祈り上げます。カード、ありがとうございます。(早稲田大学教授・伊藤洋)

●今年で定年退職になりました。時間ができたら一度お訪ねしたいとおもっています。(立教大学教授・中島力)

●旧秋十月日本ショーペンハウアー協会の会長に選出されました。今年もよろしくどうぞ。(大阪国際大学教授・茅野良男)

●4ヵ月アメリカの大いなかの大学で教えました。教育こそ使命と大学全体が納得して動いているようで感心しました。日本ではどの大学もどの教官も「研究と教育」とたてまえをいうのですが。(弘前大学助教授・籠信義)

●昨年九月、八王子南ロータリークラブで岡先生の卓話をお聞かせ頂きありがとうございました。お花見の頃にも千人会の集いを会費制で行ない会員の増強を計られたらと私も

寄付金報告

'92年12月～'93年2月

●春には恵泉のフレッシュマン・キャンプでお世話になりました。プレイン・リビング&ハイ・シンキングの原則が貫き続いているセミナー・ハウスを、現代の世相の中でまことにたのしく思います。「嵐の中に堅く立って山の上の出会いの城よ」(恵泉女学院大学教授・杉山好)

●亡き上代タノ先生の理想をこめられたセミナー・ハウス。ご発展を祈り上げます。(合田信子)

●十二月十七日付朝日新聞で、飯田宗一郎先生の近況拝見、ご活躍何よりです。関係者皆様のご健康とご活躍を心よりお祈り申しあげます。(主婦の友社通販事業本部・青柳総太郎)

●いつも岡先生からのメッセージをいただき嬉しく思います。十月二十八日からフランスに約一カ月以上交換研究で出かけます。(東洋大学教授・八木江里)

●大学生の一部を教えるようになり、千人会での情報が大変有効となっています。(日本工業大学非常勤講師・松澤正夫)

●誕生日お祝い金をするところが増えてきてとうとう一年に12回の誕生日ができてしまいました。毎月1の日です。(日本女子体育短期大学助教授・江幡玲子)

●山下幸夫氏や私は前田護郎の門下です。僅かのもの、お納め下さい。(日本女子大学教授・新井明)

●年頭に当り、ますますのご発展を祈り上げます。カード、ありがとうございます。(早稲田大学教授・伊藤洋)

●今年で定年退職になりました。時間ができたら一度お訪ねしたいとおもっています。(立教大学教授・中島力)

●旧秋十月日本ショーペンハウアー協会の会長に選出されました。今年もよろしくどうぞ。(大阪国際大学教授・茅野良男)

●4ヵ月アメリカの大いなかの大学で教えました。教育こそ使命と大学全体が納得して動いているようで感心しました。日本ではどの大学もどの教官も「研究と教育」とたてまえをいうのですが。(弘前大学助教授・籠信義)

●昨年九月、八王子南ロータリークラブで岡先生の卓話をお聞かせ頂きありがとうございました。お花見の頃にも千人会の集いを会費制で行ない会員の増強を計られたらと私も

一般寄付金

- 三、〇〇〇円 (財) 関西地区大学セミナーハウス事務局次長古屋利允殿
- 一〇、〇〇〇円 順天堂大学医学部 P3クラスセミナーご一同殿
- 一〇、〇〇〇円 東洋大学教授 白川和雄殿 (植樹)
- はなみずき(紅) 一株

第20回十大学合同セミナーご一同殿

生涯の学びの旅

(大学セミナー・ハウスのために)

- 一 そは長からぬ人生路 共に集いしわが同志 心こころと結びては いつかは解けん永遠に 友よ忘るな人生の 学びの庭の起き伏しを 旅の日毎に幸あれと 深夜またたく星たちは 塵のこの世をいたわりつ 未来を創るわが同志 真理と正義とめつつ 平和と民主きづきゆく (東京教育大学名誉教授 平澤 薫)
- 二



「社会福祉士」の全国組織が旗揚げの総会・研究大会で冬のハウスを全館使用した（'93.1.16）

業／務／通／信

'92年12月・'93年1・2月
冬季3カ月の合宿研修から

一年で利用者が一番少ないのが、冬季のこの3カ月である。それでも、寒気の中、今季は九、一八八人（213グループ）の方々がこの丘で熱心に合宿研修をされた。昨年同期より730人多い。大学の学年末試験で例年最低となる1月の稼働率も、昨年の17%に対し今年は23%と上昇した。「学術教育団体」の利用がその分増えたからである。

●生涯教育の一拠点として

自己啓発、自己開発、自己実現より豊かな人生を求め、いま生涯学習への関心が高まっている。近年、ハウス主催の

大学共同セミナーにも社会人がより多く受け入れられているが、その真剣な学習へのまなざしが学生にいい刺激となっている。「学生と社会人が共に生活し、学習し、交流する場として、このセミナー・ハウスこそ最もふさわしいのでは」との声も聞かれる。

ともあれ、能力開発、技能研修、リカレント教育―近年、社会人の様々な生涯教育の合宿が増えた。前記のように、学生の利用の少ない季節には、これらの集会所がその空きを埋める。その実例として、以下、本年1月の三つの合宿を点描で紹介する。

①ハウスでの開催が24回目という東京神学大学主催の教職セミナーは同大OBを中心とする教職者（牧師）や大学院生を対象とした卒業セミナー（リカレント教育）である。今回の主題は「国家と政治」。前東京女子大学長の京極純一氏が「日本の文化と政治」について特別講演をされた。新年早々全国各地から集い2泊した参加者88名のために、今回も恒例の館長招待のコーヒータイトムが交友館に設けられた（11頁に写真）。

②「歴史に一度！人生に一度！」をキャッチフレーズに新しい国家資格「社会福祉士」の全国組織「日本社会福祉士会」の設立総会と研究大会が1月中旬、全館使用で開かれ、全国から約300名が参加した。初日は記念式典や講演、二日目の研究大会では「老人・地域」「障害・医療」など四つの分科会で熱心に討議を交わし

⑨

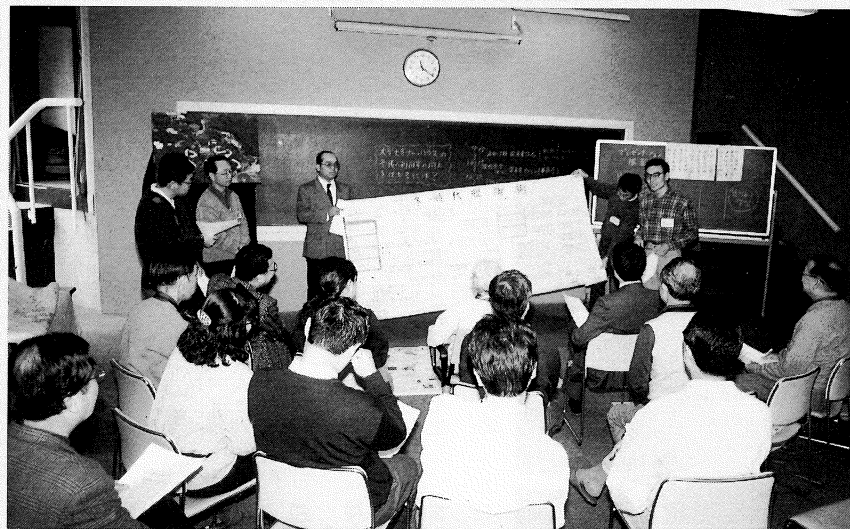
わたしたちの合宿

生涯教育のシンブルな 殿堂を目指せ

―大学セミナー・ハウスを題材としたコンサート・インテグレーション―

余暇生活開発士スクーリング講師
市川 寧

雑木林に囲まれた大学セミナー・ハウスを舞台に、余暇生活の開発士スクーリング講師「余暇生活開発士」を目指す18人のメンバーの演習活動が1月末の週末に行われた。日本レクリエーション協会主催のスクーリングプログラムの一環として行なわれたものである。



手・口・足を使っでの情報収集・調査の成果（提案）をグループ毎に大型の図解などでプレゼンテーションする受講生たち（'93.1.31）

テーマは、大学セミナー・ハウスの冬の場の利用率をいかにしたらアップできるかということに絞った。まずは手と足と口を使っでの現場情報の収集からコンサート・インテグレーション技術を身に付けることにした。

事務局の職員の方や食堂で働く人々へのインタビュー、そして、昼食を共にしながらの学生や他グループとの対話、さらに、宿泊棟や研修室、交友館、大浴場、多摩の雑木林を中心とした自然環境の調査など、限られた時間の中で「手口足調査」は、情報の収集の実習であると同時に、リーダーを中心としたグループワークの演習でもあるのだ。

現場情報の収集後はカードワークで収集情報をもとにして、テーマにどうせまるかが夜遅くまで活発に論議された。

その成果は、最終的にはA4判一枚の提案書にまとめられ、大型の図解とあわせて、クライアントへプレゼンテーションされた。

休日の増加、労働時間の短縮、そして、人口の高齢化といった世の中の動きの中で、余暇時間をどう自分らしく演出するかが、自らの人生をより豊かなものとする上で、ますます重要となってくる。

学生と社会人が一堂に会して、余暇時間の活用や生涯教育について考える、そんな交流の場として、この大学セミナー・ハウスこそ最もふさわしい場所ではないか。今こそ大学セミナー・ハウスのモットーである「プレイング」を運営の基本において、一般社会人を含めての「生涯教育のシンブルな殿堂」として、このキャンパスを世の中に広くPRしよう。これが、今回キャンペーンを利用させていただいたお礼としての、グループからのセミナー・ハウスへの「プレゼント」であった。

た(9頁上写真)。この全国集会の当ハウス開催は、実行委員の一人でハウスにご縁の明治学院大学教授・秋山智久氏が積極的に推進されたものである。

③1月最後の週末、(財)日本レクリエーション協会主催の「余暇開発士・相談員スクーリング」が2泊3日で行われた。余暇生活のコンサルタントを目指す受講生18名に課せられたプログラムの一つに「コンサルティング実習」がある。「余暇関連施設から現状の施設の改善についてコンサルティング(相談・助言)の依頼を受けたという想定で、数名ずつのグループに分かれ、コンサルティングにおける問題解決の手法を体験学習する」のそのねらいである。

そして今回は、そのテーマとして当セミナー・ハウス、特にその冬季の稼働率をいかにして高めるかが選ばれた。各グループ毎に当施設内を巡り、現場職員とも面談し、その情報を基に討論して諸提言をまとめ、翌朝セミナー室でハウス側にプレゼンテーションした。それは、講師を務めた市川寧氏(ハンディ教育研修所主宰)のリードよろしきを得て、短時間の情報収集の結果とは思えぬ適切かつ有益な(へ答申)であった。そして各グループが期待せずして異口同音にハウスへの提言の基調としたのが「生涯教育のシンプルな殿堂を目指せ」であった。この丘の自然を活かした各種の研修を長年実施して来られた市川氏に今回のユニークな合宿演習をご紹介いただいた(9頁へわ

たしたちの合宿)。

●意欲的な大学連合の学生集会

12月の第1・3週末に、大学の枠を越えた左記三つの大型集会が、いずれも学生の見事な自主運営により、2泊3日で開催された。

①第13回社会学会合同セミナー 当ハウスの主催のプログラムから自主ゼミとして独立して今年で10年。「21世紀、これからどうなる、どうする」をテーマに法政大学・田中義久ゼミ、慶応義塾大学・山岸健ゼミ、東京国際大学・小川文弥ゼミ、帝京大学・鈴木智之ゼミの四大学四ゼミ計65名がそれぞれの成果を持ち寄った(7頁に特集記事)。

②全日本証券研究学生連盟「証券セミナー大会」全国各地の大学の31のゼミと27の研究会が四つのテーマ別ブロックに分かれて証券・金融に関する諸問題を討論。ハウスでは初めてだが通算で11回目。宿泊参加285名の全国集会。

③第14回国際学生シンポジウム ハウスでは昨年に続いて2回目。参加者は全国各地の大学生、各国の留学生、そして社会人計274名。「新地球時代―われわれの選択―」を総合テーマに、11の分科会で今年も熱気ある討論を繰り広げた。本年末開催の第15回では運営委員長を務めるという慶応義塾大学の小澤一郎さん(現在3年)からこのシンポジウムとの出会いや関わりについて一文を寄せていただいた(下掲へ私の国際交流)。

私の国際交流

私と国際学生シンポジウム

慶応義塾大学法学部政治学科2年 小澤 一郎

大学・団体の枠を越えて学生が集まり、様々な国からの留学生や立場の違う社会人との二泊三日の意見交換が、より多くの人々との「ヨコ」のネットワークを広げていく―それが今年で第15回目の開催を迎える「国際学生シンポジウム」です。豊かな自然に囲まれた大学セミナー・ハウスでの寝食を共にした時間は、全ての参加者に充実感と満足感を与え、立場も関心も異なる人々との一体感を生み出してくれます。

私自身は、今年の12月に行われるシンポジ



開会式後のパネルディスカッション「新たなる世界へ―若者に何を望むか―」で熱心に意見を交わす講師と学生たち('92.12.18)

ウムには運営委員長として参加することにありません。

二年前には一参加者としてこのシンポジウムを初めて経験しましたが、自分の考えを言葉に表すことの難しさや人の意見を聞くことの大切さを改めて認識することができた素晴らしい機会でした。

自分の意見を率直に述べ、人の意見を良く聞く。極めて単純な事のようにですが、これこそ、日本人に久しく求められている真の「国際化」への第一歩ではないでしょうか。

私は高校2年の時、英国で一年間生活する機会に恵まれましたが、そこで相互理解を深めるためには「意見交換」がいかに重要であるかを痛切に感じさせられることが多々ありました。

だから、日本人という枠だけにとらわれず、異なる文化や背景を持つ様々な人々と出会えるチャンスが欲しい―そう思ったときに私に門戸を開いてくれたのがこの「国際学生シンポジウム」だったのです。

このシンポジウムを推進する運営委員会は、首都圏の大学を中心とする学生約50名で構成されている自主運営組織です。21世紀を担う私たちが、将来へのビジョンを描き、討議し、理想を追い求めていくことには大きな意義があると考えます。それを少しでも実現させる場として、国際学生シンポジウムの企画・運営を進めていきたいと思います。

八王子での話し合いから、はつきりとした形の解決が生まれることはありませんが、私たちの将来に向けての問題提起を進展させていくことは出来るはずですよ。

このセミナー・ハウスでの体験がそのスタートラインとなることを願ってやみません。

利用状況

* 11月2日利用
日帰りを除く

12月(80グループ、延三、六二人) 国際基督教大学 自分らしさへの試み

- 東京都立大学助教授 二村 敏子
- 東京都立大学助教授 日向野幹也
- 東京学芸大学障害児教育学科新入生合宿ゼミ
- 明治学院大学助教授 増田 茂樹
- 筑波大学助教授 森 政隆
- 東京電機大学助教授 八木澤壯一
- 中央大学助教授 下村 康正
- 中央大学講師 宮園 久栄
- 東京大学助教授 島園 進
- 駒沢大学助教授 森 武磨
- 慶応義塾大学有賀・益田・宮本研究室
- 桜美林大学ヴォランティア
- 武蔵工業大学助教授 野城 智也
- 成蹊大学助教授 対木 隆英
- 中央大学助教授 五井 一雄
- 駒沢大学助教授 金丸 由雄
- 早稲田大学助教授 間 宏
- 東京理科大学狩野・高橋ゼミ
- 学習院大学助教授 小島 麗逸

新年早々の合宿24日目。東京神学大学「教職セミナー」のコーヒータイトで歓談する松永希久夫学長(左3人目)、大木英夫教授、岡宏子館長(右手前から)ら('93.1.13)



- 東京経済大学助教授 色川 大吉
- 東京都立大学助教授 柳田 辰雄
- 早稲田大学助教授 染谷恭次郎
- 早稲田大学助教授 平澤 茂一
- 早稲田大学助教授 大野 高裕
- 東京外国語大学助教授 亀山 郁夫
- 東京外国語大学助教授 広瀬 泰雄
- 桜美林大学助教授 難波 豊
- 早稲田大学絵画会
- 東京都立大学助教授 山川 仁
- 一橋大学講師 田中 孝彦
- 高千穂商科大学助教授 岩田 伸人
- 高千穂商科大学助教授 藤井 耐
- 法政大学講師 古澤 聡司
- 東京外国語大学助教授 原 誠
- 日本大学助教授 菊池 敏夫
- 東京大学助教授 藤田 英典
- 恵泉女学園短期大学英文学科総合科目「国際」
- 芝浦工業大学助教授 藤澤 好一
- 工学院大学助教授 吉田 俣郎
- 明治学院大学肥田ゼミナール
- 中央外国語大学リーダースイップトレーニング
- 東京外国語大学助教授 村田 稔
- 杏林大学助教授 千葉 洋
- 芝浦工業大学助教授 十代田知三
- 埼玉大学助教授 清水 直治
- 中央大学助教授 高窪 利一
- 東京学芸大学助教授* 金谷 憲
- 東京商科学院専門学校情報システム学科コミュニティセッション合宿
- 創価大学助教授 赤木 愛和
- 函館大学講師 津金 孝行
- 日本女子体育短期大学助教授 常田奈津子
- 国士館大学建築学科意匠ゼミナール
- 立正大学助教授 厚東 偉介
- 校成学園高等学校数学研究同好会
- 第13回社会学合同セミナー
- 記念セミナー準備委員会
- 全日本証券研究学生連盟
- 第14回国際学生シンポジウム
- 近代日本研究会
- 土曜会
- 台北駐日経済文化代表處
- からだとは研究所

- 基督教児童福祉会
- 東京言友会
- 日本TAA協会
- 国際教育交流協会
- 文学教育研究者集団
- 東京海上システム開発/キリンビジネスシステム* / 共立建設/NTT移動通信網/安川電機/岩崎通信機/ハートクリエーションセミナー
- (個人利用)
- 神奈川大学助教授 堀野 定雄
- 安田精工 金井ハツエ
- エイ・エス・ティ 真藤寿美恵
- 1月(45グループ、延一、八一人)
- 東海大学助教授 坂田 長生
- 駒沢大学助教授 上條 未夫
- 慶応義塾大学助教授 中原 章吉
- 東海大学助教授 三浦 信孝
- 東京都立大学助教授 師岡 孝次
- 東京都立大学助教授 水谷 三公
- 東京都立大学助教授 千野 香織
- 東京都立大学助教授 嶋田 忠彦
- 東京理科大学狩野・高橋ゼミ
- 白梅学園短期大学助教授 民秋 言
- 東京都立大学助教授 石井美智子
- 東京都立大学助教授 大塚 和夫
- 順天堂大学医学部P3クラスセミナー
- 明星大学助教授 小川 哲生
- 上智大学助教授 石井 米雄
- 東京都立川短期大学教育実習
- 東京都立大学助教授 稲垣 寛
- 東京外国語大学助教授 田島 信元
- 学習院女子短期大学助教授 寛
- 東京神学大学第24回教職セミナー
- 立正大学助教授 関根 康正
- 竹林会
- 第5回大学教員研修プログラム
- 国際教育交換協議会
- 在日留学生会協会
- ふれあい友の会
- 東京レクリエーション学院
- 基督教児童福祉会
- 日本社会福祉士会設立総会・研究大会
- 女性のサポート・グループ
- 日本総合愛育研究所愛育相談所

- 日本レクリエーション協会
- アイワールド* / 薬日本堂 / 東芝通信テクノス / 国際交流サービス協会 / 京セラ / 多摩中央信用金庫調布支店 / 多摩中央信用金庫宇津木台支店 / 雪印物産
- (個人利用)
- 関西地区大学セミナーハウス
- 古屋 利允
- 中央大学助教授 金原 左門
- 法政大学助教授 松崎 義
- 中央大学助教授 池田 正孝
- 中央大学助教授 亀山 三郎
- 日本女子大学助教授 谷敷 春日
- 駒沢大学助教授 和崎 正光
- 駒沢大学助教授 寺中 良二
- 東京大学助教授 藤原 婦一
- 東京女子大学助教授 伊藤 善市
- 中央大学音楽研究会*
- 帝京大学講師 堀井 啓幸
- 東京大学助教授 末木文美士
- 高千穂商科大学助教授 藤井 耐
- 慶応義塾大学ワグネル・ソサイエティー男声合唱団
- 青山学院大学助教授 徳久 球雄
- 青山学院大学助教授 牧野 誠一
- 明治学院大学人形劇団ZOO
- 中央大学助教授 寺東 寛治
- 明治学院大学サークル連合会文化団体委員会
- 松尾 正人
- 法政大学講師 井口 克己
- 法政大学法学部学術団体本部
- 武蔵大学体育連合会リーダーズ・キャン
- 東京電機大学理工学部リーダーズ・キャン
- 上智大学アイセック委員会
- 早稲田大学助教授 日笠 完治
- 早稲田大学助教授 新澤 雄一
- 東京理科大学新聞会
- 東京理科大学狩野・高橋ゼミ
- 東京外国語大学助教授 山口 和孝
- 東京都立大学助教授 山之内 靖
- 東京都立大学助教授 日向野幹也
- 一橋大学助教授 町村 敬志

- 横浜国立大学体育系サークル指導者セミナー
- 東京純心女子短期大学音楽・美術・英語学科卒業研修会
- 日本大学講師 金子 佳司
- 明治大学学生保険委員会
- 早稲田大学映画研究会
- 東京都立大学助教授 宮川 彰
- 東京外国語大学助教授 中嶋 嶺雄
- 都留文科大学助教授 白川 和雄
- 聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター
- 東京女子短期大学交友会総務リーダーズ
- 聖学院ハンドベル・クワイア
- 郡内研究会
- コロポックル
- フォーカシング研究会
- 東京都高等学校教職員組合
- 東京都教職員組合青年部
- 東京若枝会
- SDA原宿TBSセンター
- ネイチャーゲームズ研究所
- ライフエイズプロジェクト
- パレエカンパニーまみむも
- 山王教育研究所
- 日本山岳協会
- 日本レクリエーション協会
- 崇教真光
- 多摩更生園労働組合* / 富士電機 / 日産クレジット* / 日本レダリー / 東芝メデイカル / 日野自動車工業 / アイワールド* / 雪印物産 / ケンウッド / ヒューマンライフセンター / 丸美屋食品工業 / 古河電気工業 / オリンパス光学工業 / 八王子テレメデア / 東芝通信テクノス / セキド / キリンビジネスシステム / 河内屋 / 東京スバル自動車 / 石橋ホーム資材
- (個人利用)
- 象設計集団
- V研究会* 陳 永興
- 富坂キリスト教センター 吉本 昌司
- ヒューマンライフセンター 布施 清雄
- 平川 雅之

第6回大学教員研修プログラム

よりよい大学教育の方法を求めて

学生と共に授業を創る

1993年9月18日～19日(土～日、1泊2日)

◆講演

いまどきの学生と心理的病

早稲田大学理工学部教授 加藤 諒三

◆提題

1. 大学教育の基本を確かめる

東京学芸大学教育学部教授 宮腰 賢

2. よい授業への入り口を探して

——人文・社会系教養科目の経験から——

東京農工大学一般教育部教授 亀山 純生

3. よりよい授業のためにどう準備し、どう実施するか

早稲田大学理工学部教授 示村悦二郎

4. 誰のための試験か

国際基督教大学教養学部教授 絹川 正吉

◆分科会

早稲田大学理工学部教授 秋葉 裕一

東京農工大学一般教育部教授 亀山 純生

国際基督教大学教養学部教授 絹川 正吉

立教大学一般教育部教授 鈴木 正男

早稲田大学理工学部教授 示村悦二郎

中央大学商学部教授 建部 正義

電気通信大学電気通信学部教授 中田 良平

東京学芸大学教育学部教授 宮腰 賢

国際基督教大学教養学部教授 原 一雄

東京女子大学文理学部教授 福田 一郎

上智大学外国語学部教授 巖山 道雄

第30回大学教員懇談会

いま、大学の理念を問う

——どういふ人間を育てるのか——

1993年10月2日～3日(土～日、1泊2日)

◆講演

大学の理念を問う——一般教育の現場を体験して——

前東京大学総長 有馬 朗人

大学の情緒——改革と改善——

前東京都立大学総長 佐野 博敏

◆パネルと討論

1. 大衆化、国際化時代における大学

帝京大学総長 冲永 荘一

2. 教育機関としての大学

国際基督教大学学長 大口 邦雄

3. 大学の研究機能

東北工業大学学長 岩崎 俊一

4. 社会の情報化と大学

早稲田大学法学部部長 奥島 孝康

5. 女子大の存在意義

前日本女子大学学長 青木 生子

第162回大学共同セミナー

ゆらぎの科学

1993年10月29日～30日(金～土、1泊2日)

◆予定講師陣

慶応義塾大学理工学部教授 米沢富美子

神奈川大学工学部教授 桜井 邦朋

東北大学工学部教授 山本 光璋

◆運営委員

東京理科大学工学部教授 武者 利光

大妻女子大学社会情報学部教授 野崎 昭弘

東京大学教育学部教授 佐伯 眸

第20回国際学生セミナー

地球時代の生き方を求めて(4)

変わりつつある世界秩序と日本

Japan in Changing World Order

1993年11月19日～21日(金～日、2泊3日)

◆ゲスト講演

新世界秩序とそのディレンマ

A New World Order and Its Dilemmas

青山学院大学国際政治経済学部教授 永井陽之助

◆セクション演習

A. 新世界秩序と安全保障 The Changing Nature of Security Issues and A New World Order

青山学院大学国際政治経済学部教授 渡辺 昭夫/防衛大学校社会科学教室専任講師 神谷 万丈

B. 国際人権と民主化 International Human Rights and Democratization

香川大学法学部教授 山崎 公士/埼玉大学大学院政策科学研究所教授 高木誠一郎

C. 地球環境と世界経済 Global Environment and World Economy

一橋大学経済学部教授 寺西 俊一/青山学院女子短期大学教授 秋山 紀子

D. 国際社会を移動する人々 "Moving People" in International Society; with Special Reference to Asia

上智大学外国語学部教授 石井 米雄/独協大学外国語学部教授 竹田いさみ

E. 世界情報秩序——グローバル時代の情報化と持続可能な発展を求めて——

World Information Order—Towards Sustainable Development in the Global Information Era

東京大学社会情報研究所教授 増田 祐司/日本経済新聞社編集委員兼論説委員 田勢 康弘

●館長室から●

梅雨明けと共に真夏の日照り、更に曇り日の涼しさが戻ったり、何やら不順な天候です。

キャンパスの雨のあとの日照りで成長が勢いづいた樹々は、重なり合っただけで、久々に来訪された先生方から、「随分、木が大きくなりましたね」と感嘆の声を聞きます。この大木、時には宿舎の屋根に覆いかぶさり、窓をこすり、建物の管理上、少々困る事態も、あちこちに見られるようになりました。

一体、どの位の木が、どんな問題をもたらしているかを、調査することになりましたら、職員の一人在りて全キャンパスを見回り、木に赤いテープを巻いて印をつけ、全体の一覧表をつくってくれましたが、何と、該当しそうな木が三百本を超えているのです。

三十年前、さすがが原に早く大きくなる木を植えて、緑の計画をたてました。三十年の月日は亭々とそびえる樹々を育てましたが、スラロームの形を描いて点在させたユニットハウスにかなりの老朽化をもたらすことにもなりました。

最近、学生を連れて来訪される先生から、「実は第一回の大学共同セミナーに学生として参加しました」といった話をよく伺います。建物の三十年、自然の三十年、そして人の営み・活動の三十年。ハウスの活動の歴史を改めて感ぜずにはいられません。

記事にある「セミナー・ハウスへのコンサルティング」をきかせて頂きながら、これも三十年の歴史の中から生まれたものと、うなずきながらも感謝の気持ちでいっぱいになりました。(岡)